

エビデンスとしての質的研究の難しさ

新潟大学医学部保健学科

高木 廣文

エビデンスとしての質的研究の難しさ

新潟大学医学部保健学科

高木 廣文

最近、タイ王国のパヤオ県でPHAグループ(HIV/AIDS感染者グループ)の面接調査を行っている。パヤオ県はHIV/AIDS感染者および死亡者ともにタイ王国の中でも高率であったため、JICAのプロジェクトが行われていた場所である。JICAはこの地から去ったのだが、私はJICAの短期専門家時代に知り合いになったタイ人に頼んで、学生のスタディー・ツアー兼調査研究を昨年から始めた。

もともとの目的は、学生にPHAグループの人間がどのように自分たちの村で生活しているかを体験して貰うことだったのだが、折角だから研究もできないかと欲が出てきてしまった。自分が初めてHIVに感染していると知ったときの衝撃はどのようなものなのか、子供が感染していたときの想いはいかなるものなのか、またなぜ自らHIV感染者であることを公にしたのか、など知りたいことは沢山ある。

このような面接調査を中心とした研究では、通常の統計学的手法による研究形態、いわゆる量的研究の手法を用いたのでは、研究目的を達成することはかなり難しい。そのため、いわゆる質的研究と呼ばれる研究方法を用いるために、その基礎的な勉強に取りかかった。しかし、量的研究しか行ったことのないものにとっては、質的研究というのは極めて哲学的な方法論であるというのが、私がもった第一印象である。

我々が行うような半構造化面接調査から得られるデータは、最終的にはすべての情報が言語に変換されてデータとなる。対象者の意識が問題になることが多いので、その意識がどのようにして言語として表現されたかが大きな問題になる。対象者が主観的に表出した言語を、調査者である研究者が主観に基づいて、概念構築をしていくという

のが、質的研究での一般的な方法と言ってよいだろう。実際には、質的研究と言っても各種の方法があるので、質的研究の初心者にはどの方法を選ばよいか困ってしまうことが多い。

少なくとも看護研究分野ではKJ法、グラウンデッド・セオリー(アプローチ)、解釈学的現象学(的アプローチ)などが主流のようである。ただし問題は、グラウンデッド・セオリーといっても、オリジナル版、ストラウス・コービン版、グレーザー版、修正版のように、さらにいくつかの種類に分かれていることである。どれを使えばよいのかは、目的によりけりだろうが、このような状況が、質的研究の初学者が現実の調査研究に使用するのをかなり難しくしていると言ってよいだろう。

統計学的手法を自分の調査データに用いるのは、最近では統計学ソフトの充実もあり、ちょっと勉強すれば卒論の学生でも簡単にできるだろう。一方、質的研究を行うのは結構難しい。グラウンデッド・セオリー関係の本を数冊読んでも、どうやって研究を進めればよいのか、なかなかそのイメージが見えてこない。そのためか、質的研究の本には大抵、初めは「質的研究の指導者」のもとに研究を行う方がよいというようなことが書かれているのが普通である。ということは、質的研究は家元制度のようなものなのであろうか。華道や茶道のように家元によって、各流派に分かれるように、初心者はまずある流派に所属して腕を磨き、その後、独立して独自の道に進むべきなのだろうか。もしそうだとすると、質的研究というのは、指導者選びから始めなければならないので、周囲にそういった研究者がいない場合には、始めることさえできないというかなり面倒くさい方法と言うことになる。

一般には、統計学的方法を用いた量的研究は、データの主観的解釈を中心とする質的研究に比べて科学的方法であると考えられている。少なくとも、量的研究を行っている者の大部分はそう思っているだろう。面倒でかつ科学的でないと言われるのであれば、なぜ質的研究を行うのであろうか。理由は簡単で、すでに述べたように、量的研究では適さない研究領域があるからであり、質的研究でしか扱えない研究課題が存在するからである。

もともと、グランデッド・セオリーは、質的なデータに基づいて、科学的に研究課題に関する理論構築ができるように考案されたものである。したがって、言語情報から特定の概念をコード化し、カテゴリ化し、モデル化するための方法は、主観的であっても科学的であるように、考えられている。我々の常識、少なくとも客観性こそが科学だと思っているものにとっては、なかなか理解するのが難しい点でもある。また、一方では量的研究者から科学的でないといわれることに対する理論武装強化のために、実際の手順が極めてわかりにくくなっているのではないだろうか。もっとも、主観と客観については、それこそ哲学的な視点でいろいろと議論されているので、門外漢が論じても埒があかないので止めておこう。

ところで、統計学的手法を主に使う量的研究であっても、検定や推定を中心に研究を進める推測統計学中心の立場と、記述統計を中心に探索的にデータ解析をすすめる立場がある。後者は、データに基づいてデータの語るところを抽出していくという現象のモデル化や理論構築を目指す立場でもある。おもしろいのは、グラウデッド・セオリーは、この探索的データ解析の立場と同様の視点に基づいて、質的に科学的に研究を行うことを意図して考案されているという点である。データの分析や解釈の方法に量的か質的かという区分はあるのだが、目指すゴールは共通している点は興味深い点である。

このところEBM（エビデンスに基づく医療）などが話題になるのだが、これは量的研究の範疇で考えられているため、エビデンスとなるような

研究は、統計学が要求する標本の無作為化の程度によってランク付けがなされるのが普通だろう。この点は、雑誌に投稿されてきた論文の査読時の評価などでも同様だろう。質的研究では、対象者の選定は研究目的に応じて任意に選ばれるのが普通なので、通常のEBM的なエビデンスの考えから言うと、最低ランクくらいにしか考えられないのではないだろうか。したがって、本誌に質的研究による論文を投稿しても、現状では査読者が量的研究の評価基準で判断した場合には、採用となるのは極めて困難だろう。

すでに述べたように、主観的であるとか非科学的であるとかの批判を受けやすい質的研究の論文ではあるが、実際には対象選択の方法、データのコード化、概念化、モデル構築などのための方法や手順は、そういった批判に耐えるためにかなり発展していると考えてよいようである。量的研究と質的研究を組み合わせる方法や、スーパーバイザーや対象者自身に結果を評価させる方法などもあり、反省的かつ科学的であろうという姿勢はかなり強いように思われる。

この点から言うと、適切に実施された質的研究の論文であれば、その結果に新規性が認められるのならば、できるだけ本誌に掲載されるようにすべきだろう。問題は、本誌に関係するような多くの研究者は、これまで統計学的な量的な研究世界に慣れ親しんでいるため、意識や意味などの質的な研究世界に慣れておらず、そのためそのような研究論文を排斥しようとする傾向があるのではないだろうか。

多くの量的研究は統計学の使用を前提としており、今ではコンピュータなしには考えられない。言い換えれば、データさえあれば、ある程度以上のレベルの研究者ならば、誰が解析しても得られる結論に大差はないだろう。しかし、質的研究では、本質的に研究者自身の頭脳がコード化、カテゴリ化、概念化などを行う装置となる。したがって、質的研究の結果は研究者の資質・能力に大きく依存するといってよいだろう。この点から、質的研究は主観的であるとか、科学的ではないと

いう批判が起きるのだが、優れた研究者による質的研究は量的研究では考慮されない視点から、多様な現象の新規な理論構築を行うことができるかもしれない。

エビデンスとして、質的研究による論文をどの

ように位置づけるかという点に関して、今のところ多くの研究者を納得させるような定まった考えはまだないのだが、今後、本誌にも意欲的な質的研究の論文が投稿され、掲載されることを期待している。
